第32回　ヘビ

干支にもなっているヘビは、私たちの周りにいる身近な生きものですが、あまり好かれておらず、危険な生きものとして認識されがちです。たとえば、ヒバカリは、とてもおとなしい小さなヘビで毒はありませんが、噛まれたら「その日ばかりの命」といわれています。

日本では沖縄と奄美を除けば、マムシ以外は基本的に危険はなく、多くのヘビは農作物の被害をもたらすハタネズミを食べたりする益獣です。生態系の食物連鎖の中でも、高次の捕食者として重要な位置にいます。それなのに、どうして、ヘビは嫌われてしまうのでしょう。

脚がない、細長い、というのはヘビの基本的な特徴で、それらを嫌いな要素に挙げる人もいます。しかし、ミミズとかウナギとかに対してはそのような感情は持ちません。鱗があるということを挙げる人もいますが、他の爬虫類や魚類に対しては気にしない人もいます。脱皮をする、餌を生きたまま丸呑みするなどの生態から、生命力が強い、執念深いなどの印象が、怖れや忌避につながっている可能性があります。しかし、そうした光景を見たことがある人はあまりいないでしょう。とぐろを巻くから嫌い、2又の舌をペロペロと出すからいや、という人もいますが、普遍的な感情とまではいえないでしょう。毒蛇という実際の危険性からの恐怖ということも考えられますが、先に述べたように本土にいる限りは危険はほとんどありません。また、人を飲み込むような大蛇は日本にはいません。

そう考えると、ヘビを怖がるのは、幽霊や妖怪を怖がる心理と同じで、いわば共同幻想ではないかと思います。また、ヘビを見た人が極端に怖がることで、なんとなく恐怖の伝播のようなことが起こることも考えられます。たしかに、狭い石積みの隙間や地面の穴から突然現れ、長いリーチから大きく開いた口が噛みついてきそうな雰囲気がヘビにはあります。そうしたことが背景となって、「夜に口笛を吹くとヘビが出る」などの迷信が生まれ、一方で、怖れはヘビを神聖なものとして捉えることにもつながっていると思います。

いわば文化としてヘビが嫌われているということですが、最近の研究では、霊長類にはヘビを見ると即座に警告を発する特殊な細胞が先天的に脳内にあるとする論文も出ていて、進化の過程でヘビを怖がる形質を獲得した可能性もあるようです。

いずれにしても、日本のヘビにとっては、いわれなき拒絶を受けているのでしょうが、ヘビからみれば過剰に人の干渉を受けないで済んでいるのかも知れません。最後に、河北潟では、シマヘビ、アオダイショウ、ヤマカガシが多く、ジムグリも見られるようです。マムシがいたという話は聞いたことがありません。ヘビを見かける機会は年々減ってきているように思います。（文　高橋　久）